

論文の内容の要旨

論文題目 他者と共に「物語」を読むという行為—「焦点化」に着目した教室談話分析—

氏 名 濱 田 秀 行

本研究の目的は、交流を通して「物語」を読み深める授業における生徒の読むという行為を教室談話という社会文化的状況に位置づけて明らかにすることである。全5部9章からなる。

第I部第1章では、物語が出来事と出来事を関連付け筋立てる行為であり、語り手（書き手）と聞き手（読み手）の対話によって成立する協働的性格を有していることを心理学・文学領域の先行研究から検討した。次に、物語が生成的機能を持ち、人の存在を理解する様式であることを述べた。そして、「物語」についての読みの深まりを考える上で、景観の二重性という、「物語」のことばの仕組みと「物語」に対する読み手の理解・反応とを関連付けて捉え分析することが課題として残されていることを整理した。さらに、先行研究では、「物語」を読むという行為が教室談話に位置付けて考察されていないことを指摘した。そこで、上記の目的を達成するため、社会文化的アプローチに基づき、生徒が「物語」を読むということを物語 narrative という文化的道具に媒介された行為、すなわち、「物語」を「読むという行為」として捉えることを述べた。これを検討するためにバフチンの発話の対話的定位置（1989）、ならびに「声」（1996）の概念を枠組みとす

ること、さらに読みを創り出した「声」を捉えるために「発話」における「焦点化」(ジュネット, 1985a ; 1985b) に注目することとした。上記の議論を踏まえ、本研究の研究課題として、①「物語」の景観の二重性と読みの深まりの過程、②読むという行為の個人の相違、③他者の読みを取り込む際の自己内対話の過程、④授業の振り返りにおける省察的な自己内対話の過程、⑤教室談話を形づくる授業観と読むという行為とのかかわりの5点を明らかにすることを研究課題として整理した。

第2章では、上記の研究課題を検討するために行った中学校・高等学校での「物語」を教材とする単元の連続する授業の観察の方法の概要と生徒の自己内過程について検討するための学習過程を分節化して捉える分析方法について論じた。

第Ⅱ部では、交流を通して「物語」を協働的に読み深める過程について明らかにするため、中学校2・3年生の授業の観察(25時間)から小グループでの学習活動における談話過程を質的に検討した。

第3章では、①「物語」についての読みが深まるということがどのような認知過程であるのか、物語の基本的な特徴である景観の二重性と関連付けて記述するために、実際の談話過程について発話の焦点化の様態に着目して具体的分析を行った。その結果、(1) 物語を創り出す生徒の「声」の相違によって、話題となっている出来事に関連付けられる別の出来事を選択のあり方や出来事を検索する範囲の限定のあり方が異なること、(2) ある出来事に対する複数の意味づけが重ねられることによって、個人としての生徒が発話を創り出す「声」を多重化していくこと、(3) ある登場人物の内部の「声」の対立を主題とし、それが直接的に物語言説に示されている「物語」についての読みの交流過程から、このような登場人物の二声性について考える際に、他の登場人物がその登場人物に対して取った言動を生徒が手がかりとして利用すること、(4) 物語言説における音声の要素に注目することが、二声的な読み、すなわち話題となる出来事についての複数の登場人物の意識を踏まえた意味づけの生成につながっていくこと、(5) 異質な「声」の関連付けが、生徒間だけではなく「物語」の語り手を含めた三者の間の相互作用において捉えられることが示された。これらのことから、「物語」についての読みを交流する談話過程が、出来事や登場人物についての様々な声を捉えることのできる場であり、その展開の中で生徒が二重の景観を関連付ける読みを生成することが示唆された。

第4章では、②「物語」についての読みが協働的に深まる過程と個人の読みの相違との関連性を明らかにするために、登場人物に対する複数の生徒の反応に着目して談話過程の分析を行った。その結果、(1) 生徒が談話過程に自分の読みを示していく際の焦点

化の決定に登場人物への共感に関係していること、(2) 特定の登場人物に対する共感的な読みと反感に根ざす批判的な読みが談話過程に対置されることで「物語」についての読みが深まっていくこと、(3) 物語言説の明示的な二声性が、出来事についての複数の登場人物や語り手の視点を踏まえた意味づけを生徒に促すことが示された。ここから、生徒が交流を通して「物語」についての読みを深める過程において、「物語」の登場人物に対する共感、あるいは反感という生徒による感情的な態度の違いや談話過程における生徒の役割の違いが、個々の発話の焦点化のあり方に作用し、その焦点化の相違が出来事についての多声的な読みを可能にしているということが示唆された。

第Ⅲ部では、高等学校1年生の授業の観察(12時間)に基づき、交流を通して「物語」を協働的に読み深める授業中に行われる生徒の自己内対話について、生徒の書いたものと談話過程とを関連付けながら質的に検討した。

第5章では、③生徒が他者の発話を自らの読みを示す発話の中に取り込む際の自己内対話の過程について検討を行った。物語の主要な登場人物への共感の程度が異なる生徒間で行われた読みの交流の事例の記述と解釈を通じて、(1) 読みの取り込みの際に行われる自己内対話の過程が、他者の読みを再文脈化するための新たな文脈の創造としてとらえること、(2) 「物語」の虚構世界に、話題となっている出来事にかかわる適切な登場人物がない場合に、生徒が名前のない登場人物を想像し、その人物に焦点化すること、(3) 自分の読みとは異なる「声」から創り出された他者の読みを取り込む際に、自分の「声」でその読みを編集する場合のあることが示された。ここから、他者の読みを生徒が自分の読みの中に取り込むことは、単なる模倣ではなく創造的な行為としてとらえられ、この行為が、異なる読みをつなげて話題となっている出来事についての理解を深めることを促す働きを持っていると言える。その一方で、物語内容の登場人物や出来事について考えることと「物語」の語りについて考えることが排他的に作用する場合のあることが示唆された。

第6章では、授業の振り返りにおいて生徒が行う省察的な自己内対話の過程について明らかにするために、小グループでの読みの交流、その後に設定された教室全体での議論、それぞれの過程と、授業の終末に生徒が書いたものとの関連付けて検討した。ある生徒の読みが教室全体の議論において他の生徒によって復唱された事例の記述と解釈を通じて、(1) 「物語」の読みを協働的に深める授業の談話過程の展開において生徒が他者による発話連鎖のうちに「自分」の読みの深まりを体験すること、(2) 話し合いを積極的に聴いていた生徒にとって、振り返りの学習活動が新たな解釈を生成する機会とな

ることが示された。ここから、読みの交流を通して個々人がそれぞれの読みを深めることを目標として行われる「物語」の授業において、なかば他者／自分のことばという読みに対する著者性の意識が、議論における生徒の能動的な聴き方を促し、それが授業の振り返りにおいて「物語」のより広い範囲を対象とする新たな解釈の生成につながることを示唆された。

第IV部では、高等学校1年生の授業の観察（12時間）に基づき、生徒が特定の読み方に特権的な地位を与える過程について生徒の書いたものと談話過程とを関連付けて質的に検討した。

第7章では、⑤教室談話を形づくっている授業観と「物語」の読みの授業における生徒の読むという行為とのかかわりを明らかにするために、第5章と第6章で検討した授業について、単元を通じての生徒の読みの深まりの過程と談話過程における教授的質問やIRE連鎖の示す権威的関係の揺らぎについて記述的分析を行った。その結果、(1) 単元のごく初期に教師によって権威付けられた短いキーワードによって、「物語」の全体にかかわる特定の読み方が生徒たちに適切なものとして受け入れられること、(2) 生徒が小グループでの学習活動を通して「物語」と他者、そして自分と深く対話することで教師の想定する解釈を越えて、教師が想定していない新たな解釈を見出しうることが示唆された。このことから、教室談話を形づくる授業観と「物語」の授業における生徒の読むという行為とのかかわりが一方向的なものではなく、生徒の読むという行為によって教師の授業観の方が変わる可能性のあることが示唆された。

第V部第8章では、第3章から第7章の知見を踏まえ、交流を通して「物語」を読み深める授業における生徒の読むという行為の特徴について総合的な考察を行い、本研究の意義と課題を整理した。本研究では、「物語」の読みの交流について、発話の焦点化に着目することで、話題となる出来事に対する意識のあり方を虚構世界の登場人物と関連付けて検討し、「物語」を読むという行為の過程が、①話題となる出来事についての「物語」における語りにおける焦点化の様態、②談話過程において生徒が応答しようとしている他者の発話の焦点化の様態、③生徒が登場人物へ抱く共感／反感という3つの要素の密接に関連した相互作用の中で形成される様相を明らかにした。今後の課題として、協働的に構成される対話の過程を検討するアプローチによって、「物語」の読みにかかわる複数の学問領域における理論を関連付け整理していくことや、物語言説の多様なあり方を考慮してそれぞれの構造や特徴に応じた読みの深まりを検討することなどが残された。